

「スピリチュアル・ブーム」をどうとらえるか

—福岡県内の大学生を対象とした意識調査より—

中 村 晋 介

要旨 現在の日本では、「スピリチュアルなものへのあこがれ」、いわゆるスピリチュアル・ブームが、若い世代の間にも広がっている。ここ1～2年の間に、社会学や心理学の領域で、この要因を考察した論考が多数出版された。

本稿で、著者はこれらの論考を6つのパターンに分類し、それらを仮説としてその妥当性を検討する量的調査（福岡県内の4大学を対象、有効票509）を実施した。具体的には、①自己責任が強調される風潮のに耐えられない個人化した自己が求める「癒し」への希求、②スピリチュアルな言説と既存宗教の言説との連続性への忘却、③土井隆義が言う「キャラ化」した自己の動機付に関連した議論、④「大きな物語」への依存と忌避を並列させようとの思い、⑤望ましい心理的影響のみを求めるプラグマティックな心理主義、⑥TVメディアの培養効果、の妥当性を計量した。

量的分析の結果、これらの仮説のほぼ全てが棄却された。分析を進めると、スピリチュアルなものへの関心が、女性のジェンダー・トラッキングに関係している可能性がむしろ示唆された。今後、ジェンダーの視点でスピリチュアル・ブームを研究することは、宗教社会学のみならず、ジェンダーに関する社会学的研究をも前進させる可能性がある。

キーワード スピリチュアル・ブーム 多元化した自己 ジェンダー

1. 本稿の目的

1960年代後半の欧米では、「世俗化」に関して活発な議論が展開された。世俗化とは、「社会と文化の諸領域が宗教の制度や象徴の支配から離脱する」プロセス、あるいは「世界と自分の人生を宗教的な解釈の恩恵なし

に眺める人びと」の増加を指す（バーガー1967=1979:165-166）。

世俗化は宗教の衰退を意味するものではない。世俗化は、宗教性が「社会生活の特別保護区=個々人の私的領域に限定される」過程として読み解くことも可能であるからだ。個人の選択や趣好の問題となった宗教は、逆に各個人の

上でそのリアリティを向上させる場合もある(バーガー 1967=1979:206-207)。世俗化を宗教のプライベート化と位置づけるコックスは、社会制度や慣習といった雑音から解放された信仰者が、より純粋に宗教と向かい合うことを可能にする契機として、世俗化をむしろ肯定的に捉えている(コックス 1965=1967:15)。

1970年代後半から欧米社会で顕著になったキリスト教テレビ伝道師の活躍やニューエイジ運動の勃興とつきあわせた時、バーガーやコックスの卓見は十分に理解できよう(土佐 1998:121、伊藤 2003:19)。

話変わって現代の日本である。1990年代のオウム真理教事件により、宗教的なもの(特に新宗教的なもの)に対する忌避感情が高まったこの国において、近年、「プライベート化された宗教」のリアリティが高まっている。すなわち、江原啓之ブームを典型とする「スピリチュアルなものへのあこがれ」、いわゆるスピリチュアル・ブームである。

現在進行形で広がっているこのブームの中核は、心霊と交流できる特殊能力者によるメッセージの仲介儀礼という形をとるテレビのバラエティー番組、あるいは「スピマ」のようなイベントという形で、誰でも無料でアクセスできる形で展開される大規模な交霊会である¹⁾。ここでは、来談者が持ち込んだ死者・行方不明者ゆかりの品から、特殊能力者が、死者・行方不明者からのメッセージ(人生の指針や、仕事や家庭の悩みに対するアドバイス、行方を探すことの是非など)を解説し、それをわかりやすく来談者に伝える実践が展開される。この儀礼においては、1)特殊能力者が、先祖祭祀のあり方について助言を与えること、2)「スピリチュアルは宗教ではない」とのメッセージが強調さ

れることが指摘されている(香山 2007:84、石井 2008)²⁾。

なぜ現在の日本で、このようなブームが生じたのか。まず参照すべきは、1980~1990年代における日本の宗教シーンの変遷を丹念になぞり、現在のブームに至る系譜学的研究をおこなった島蘭進の著書『スピリチュアリティの興隆』(2006)であろう。島蘭は同書で、「1970年代、80年代にニューエイジや精神世界とよばれたもの、あるいは同時期以降、伝統宗教の枠に収まらない新たなスピリチュアリティと見なされてきたものを広く見渡すための用語」として「新霊性文化」という概念を提唱した。具体的には、「魂・霊性(スピリチュアリティ)・宇宙意識、意識の変容・心とからだの覚醒・気づきの体験、大いなる自己(Higher self)・大霊(Oversoul)、アミニズム・自然の霊とのふれあい・古神道、気功・癒し・セラピー・臨死体験・輪廻転生、ディープエコロジー・ガイア・意識の進化」などがこのカテゴリーに含まれている。島蘭は、新霊性文化勃興の理由を、①1970年代から急速に浸透した社会の個人化、②知的エリート層の権威失墜(「国民」や「進歩」の後光を失って、特殊領域の「専門家」に成り下がる)、③死生学・死生観の重要な問題として生命倫理に関する問題が浮上したこと、④自助ネットワーク運動の流入、⑤救済宗教(特に1970年代以降に発展した新宗教団体)の排他主義化、の5項目に求めている(島蘭 2006:276-299)。

現時点から振り返ってみると、島蘭が立てた議論には、補完すべき点が3点ほど残されている。その第1は、超越論的な立場から「新霊性文化」を定義しようとする島蘭の立ち位置に由来するものである。宗教学・宗教社会学を修め

た島藪はさておき、宇宙意識についての話と、セラピーやエコロジーに関する話が同じ範疇だと言われて納得する人はむしろ少ないのではないか。本質直観的に下された島藪の定義が、世俗化社会の中で現実にスピリチュアルなものを支持している一般大衆（特に若い世代）の定義と合致する保証はない。

スピリチュアルという単語それ自体は、欧米で展開されたニューエイジ運動に確かに由来しているものだろう。しかし、既に見たように、先祖祭祀や死者の魂の實在に重点を置く日本のスピリチュアルは、「血縁関係や共同体から独立した個人の聖性」のみを重視する欧米のニューエイジとは似て非なるものと捉えるべきではないか（伊藤 2003:19）。

第2は、島藪の研究が「新霊性文化の勃興」に至るまでの過程の分析に重点を置いている点である。島藪には、日本社会のまさに現時点において、人びとがなぜスピリチュアルなもの（テレビ番組やイベント）を支持／希求しているのかを積極的に説明する志向はない。第3に、質的研究に基づく島藪の研究が、スピリチュアルなものへの関心が、どのような人びとにどの程度広がっているのかを定量的な面から論証していない点にも不満が残る。

著者は、2009年7月に、福岡県内の4大学に通う大学生509名について意識調査をおこなった。対象者の抽出／調査票の配布・回収は以下のおこなった。1)福岡県内の大学のうち、いわゆる「大学ランク」（予備校などの受験産業が示す合格難易度）、及び専攻（理系／文系）を勘案して4校（国立1校、公立1校、私立2校）を抽出。2)ついで、これら大学の講義で、複数学部にまたがって開講されており、男女比の偏りがなるべく小さい講義を抽

出、3)当該講義の担当者に面会して調査の趣旨を説明し、了解を得た講義で、福岡県立大学から出向いた調査員が無記名の自記式調査票を配布・回収した。調査票の配布直前には、学生全員に趣旨を説明し、了解を得た学生に対してのみ調査票を配布している。回収後も、調査票は鍵のかかるキャビネットに保管、入力後の調査票は、2010年3月にすべて断裁処分にかかるなど、学生のプライバシー保護に細心の注意を払った。

調査票に記載された主な調査項目は、友人数、インターネット利用度、携帯電話利用度、「オカルト」への関心度、メディアへの信頼度、科学への信頼度、自己認識、対人関係規範、政治観などである（回答者の属性については表1）。本稿はこの意識調査をもとに、島藪が積み残した3つの問題点にアプローチしようとする試みである。

2. 「スピリチュアル」の範囲

「心霊」「交霊術」といった話題は、未確認生物や宇宙人などの話題（いわゆる「オカルト」）とひとまとめにされることも多いが、今の若者にとって、これらはどのように分別されているのだろうか³⁾。

今回の調査では、超常的・神秘的・疑似科学的とされる現象を取り扱ったテレビ番組への関心（放映されたら視聴すると思うか、思わないか）を4件法で調べた。具体的な番組内容としては、1)UFO・宇宙人、2)ネッシー・雪男などの未確認生物、3)日本や世界の未来に対する予言、4)モアイやピラミッドなど謎の古代文明、5)秘密結社や政府の陰謀、6)超能力者による行方不明者の透視捜査、7)亡くなった

人からのメッセージ、8)血液型性格診断・相性分析、9)美白やダイエットに効果があるサプリメント、10)風水にもとづいた部屋の模様

替え、11)星占いによる自分の運勢、12)自分になじみのある場所の都市伝説、を提示した。

これら12設問への回答に対して、因子分析

表1：回答者の属性

性別	男性	女性	無回答	合計
国立大学法人A大学	23	32	0	55
公立大学法人B大学	24	184	3	208
私立C大学	47	73	0	120
私立D大学	107	14	2	123
全体	201	303	5	509

専攻	男性	女性	無回答	合計
文系	76	194	0	270
理系	125	109	0	234
無回答	0	0	5	5
全体	201	303	5	509

表2：因子分析結果／因子相関行列

	因子1	因子2	因子3
問6②(5)：星占いによる今日の運勢	.756	.102	-.107
問6②(4)：風水にもとづいた部屋の模様替え方法	.742	.052	-.003
問6②(3)：美白やダイエットに効果があるサプリメント	.689	-.115	.022
問6②(2)：血液型による性格分析・相性診断	.676	.008	.107
問6①(2)：ネッシーや雪男などの未確認生物	-.054	.947	.009
問6①(1)：UFO・宇宙人の目撃談	-.026	.888	.073
問6①(4)：モアイやピラミッドなどの謎の文明	.102	.528	-.115
問6①(6)：超能力者による行方不明者の透視捜査	-.082	-.070	.978
問6①(3)：日本や世界の未来に関する超能力者の予言	.055	.221	.601
問6②(1)：亡くなった人からのメッセージ	.257	-.032	.579

因子相関行列	1	2	3
1	1.000	.228	.590
2	.228	1.000	.625
3	.590	.625	1.000

表 3：分散分析結果

「テレビに登場する超能力者や霊能力者の中には、本当に不思議な力を持った人もいる」への賛否で対象者を分割した上で、第3因子の因子得点の平均値を算出して比較した

	度数	平均値	標準偏差
反対	78	-0.618	0.836
やや反対	109	-0.248	0.850
やや賛成	212	0.139	0.851
賛成	102	0.449	0.978
合計	501	0.000	0.940

F (497,3)=26.575 p<.001

	度数	$\alpha = 0.05$ のサブグループ			
		1	2	3	4
反対	78	-0.618			
やや反対	109		-0.248		
やや賛成	212			0.139	
賛成	102				0.449
有意確率		1.000	1.000	1.000	1.000

(最尤法)をおこなった。天井効果・フロア効果、共通性の数値を考慮して全変数を投入、固有値の変化と解釈可能性を考慮して3因子構造を妥当とした。プロマックス回転後の因子パターンを表2に示す。第1因子は、各個人に關与する隠された知識への関心、第2因子は、どこか遠い世界に関する隠された知識への関心と解釈できよう。そして超能力捜査、超能力者による予言、亡くなった人からのメッセージの3変数に高い負荷量を示す第3因子を、「スピリチュアルなものへの関心」と解釈した。

第3因子に対応する因子得点を算出し、「テレビに登場する超能力者や霊能力者の中には本当に不思議な力を持った人もいる」という意見への賛否で比較(分散分析)したところ、顕著な有意差が現れた(表3)。石井研士が指摘し

たように、スピリチュアルなものへの関心は、テレビに登場する「テレビ霊能者」のカリスマ的な魅力に惹きつけられている可能性がある(石井 2007)。また、この因子に負荷量が高かった設問に、テレビ霊能者が登場する番組のタイトルに使用される「予言」「メッセージ」「捜査」という言葉が入っていたことにも着目したい。スピリチュアルなものへの関心とは、テレビ霊能者のスピリチュアルな言説への関心にほかならない。以下はこの得点を、スピリチュアルな言説への関心度得点と記載する。

3. スピリチュアルなものの支持回路

ここ1~2年の間に、島菌が積み残した第2の問題、スピリチュアル・ブームを現在進行

形で支えている要因を分析する論考が相次いで上梓された。本稿では、その中から香山リカ(2007)、小池靖(2007)、木原喜彦(2007)、石井研士(2008)を取り上げる⁴⁾。これらの論考の中には、本格的実証研究というよりはエッセイに近いものがあることも事実である。しかし、手がかりはここにしかない。これら論者たちの主張を集約・整理して、要因に関する作業仮説を構築し、実際に得られた量的データでそれらの仮説を検証していくことが、本稿の具体的な研究実践となる。

上記した4つの論考は、本稿で言う世俗化、すなわち「聖なる天蓋」としての「大きな物語」の消滅と「中間集団の崩壊」により、「裸の個人」が全体社会と直接向かい合う「個人化した社会」が成立したことを前提にしている点で共通している。(香山 2007:138、小池 2007:145、木原 2007:68、石井 2008:232)。この前提の上で、論者たちは、スピリチュアル・ブームの要因を、1)個人化の中での「自己」のありよう、2)プラグマティックな立場からの心理主義・科学批判、3)マスメディアの影響、の3点に求めている。以下、これらを順番に見ていこう。

3.1 個人化の中での「自己」

個人化した社会の中で傷ついた自己は、ある種の「癒し欲求」＝「傷ついた今の自分を肯定してもらいたいという欲求」を持つ。香山や小池は、この欲求を充足させてくれるものとして、スピリチュアルな言説が支持されていると主張している(香山 2007:114、小池 2007:114)。

現在の日本社会には、「努力しても生活水準が上らない人びと」が一定数存在している。これらの人びとに求められているのは、「自己

責任なのだから心して受け入れろ」という突き放しの言葉や、「努力すればきっと将来報われます」という励ましの言葉ではない。求められているのは、カリスマ的な魅力をたたえた人物から発せられる「悪いのはあなたではない」「そのままでもいい」という許しの言葉、今の自分の姿を受容してくれる言葉(香山 2007:114-115)、彼／彼女たちが「傷つき癒されたい『弱い自己』」であることを裏付けてくれる言葉なのだ(小池 2007:145)。このような現象が生じる背景として、「大きな物語」や「中間集団」を失った人びとにとっては、社会や政治、歴史といった中間的世界・現実的世界を生きる人間の言葉よりも、それを飛び越えた先からの言葉にリアルさを感じてしまうことが指摘される⁵⁾。こうして「霊的な意味では私たちはみな1つであり、死んでも魂は永遠であるという思想は、格差社会によって生きる意味が見いだせない人にとって慰めのメッセージ」として受容される(小池 2007:146)。

このような心性は、アメリカにおいては「大きな物語」への再同一化欲求として結実した。かの国において、テレビ伝道師の信奉者たちが、キリスト教右派として見過ごせない社会的勢力を構築したことは記憶に新しい(土佐 1998:121)。

しかしながら、こと日本のスピリチュアルな領域における問題はそう単純ではない。従来型の先祖祭祀や古典的な夫婦関係の復活、地域の寺社への参拝などを強弁した細木数子に対して、多くの女性——彼女が出演する番組を見ること自体が、スピリチュアルな言説への関心を裏付ける——が拒絶反応を示したことは記憶に新しい。一方、現在も人気を保っている江原啓之は、死者に対して敬意・追慕の念を抱くこと

の重要性を喚起するものの、既成宗教の枠組みにとらわれることには批判的である。細木が嫌忌され、江原の「スピリチュアル」が受容され続けているという現実を見る時、①「大きな物語」への接近と、「大きな物語」の忌避という矛盾したメンタリティを、矛盾なく並立させる回路があること、②その回路それ自体が、人びとを再帰的な形でスピリチュアルな言説に惹きつけている可能性が示唆される。

この回路として香山や木原が提示するのが、「自己の多元化」である。ただし、香山や木原の議論は、必ずしも社会学的な分野の発想に基づいているわけではない。本稿では、同じく「自己の多元化」をキーワードに若者論を展開する土井隆義（2009）、浅野智彦（2006）の議論を一種の解析格子として、香山や木原の議論を社会学的ディスコースに翻訳してこの議論を提示したい。

自己の多元化とは、自己を本質的な人格である「内キャラ」と、状況志向的でペルソナ的な人格である複数の「外キャラ」に分割していくこと、さらには、現実に人間関係を取り結ぶ他者をもまた、自己と同じような多元的存在として認識することを指す（土井 2009:23、浅野 2006:238-239）。この時、内キャラは、生得的なメンタリティとして認識されるものであり、「私は……するように生まれついたキャラ（内キャラ）をもった人間だから……する」という行動原理を自分自身に対して提示する存在となる（土井 2009:32-35）。「外キャラ」は、場の空気を読みながら、対人関係を円滑に進めていく複数の自己像である。

現実の人間関係で葛藤が生じたときに、この分割は一種の機能を発揮する。不用意な行動によって自分が傷ついた／相手を傷つけた場

合でも、そこで傷ついたのは、仮の存在である「外キャラ」に過ぎないとの認識が生まれる。この認識はすなわち、「人格＝内キャラ」は無傷だという認識を生み出し、その「場」、さらにはその「場」に準拠する自己を安定させていく。「内キャラ／外キャラ」に代表される自己の多元化とは、対人関係を円滑に進め、自己を安定させるためのスキルなのだ（土井 2009:20-21、浅野 2006:239-240）。

この「キャラ」の分割が、「大きな物語」への近接と忌避とを並立させ、人びとをスピリチュアルな言説に向かわせると香山は主張する（香山 2007:140-144）。「怪しい新宗教」のニュースを読んでいる時のキャラ、伝統的な宗教儀礼に参加しているキャラ、そしてスピリチュアルな言説に触れているキャラは、多元化によってそれぞれ断絶し、お互いの存在を忘却してしまうからだ。多元化している以上、スピリチュアルな言説と、新宗教・既成宗教の言説との連続性は看過されてしまう。「オウム（真理教のような新宗教）や（既成）宗教にはまる人と、スピリチュアルにはまる私には何の関係もない」「オウム（真理教）や新興宗教をやっているのは悪い人⇔スピリチュアルをやっているのはよい人」といったイメージが確立し、それがテレビ霊能者への無条件な帰依として表出する。

一方、自己の多元化は、「内キャラ」の動機付けを正当化しようとする時に致命的な問題を抱えてしまう。木原喜彦は、ここにスピリチュアルな言説への結節点を見いだす（木原 2007）。既に見たように、「内キャラ」の動機付けは、「私は……する内キャラを持った人間だから……する」という自己言及的で脆弱な回路に依拠せざるを得ないからだ。江原啓之の言説において、「霊」が現実社会に及ぼす影響力は

むしろ小さい(しばしば皆無)と位置づけられていることに木原は着目する。何もしない霊が存在すると想定すれば、「内キャラ」の動機付けを外部(=そのような霊が発する閾値下の影響)に求めることが可能になり、自己言及の脆弱さから解放されるからだ。またこの解放により、ひるがえって「内キャラ」の存在が論理的に裏付けられることにも木原は着目している(木原 2007:69)。

さらに別の形で、自己の多元化とスピリチュアル的な言説との結びつきを考察したのが中村雅彦である。世俗化した現代の日本社会においても、かつての「大きな物語」の形骸が、「既成の秩序やしきたり、伝統的価値」という形で歴然と残存している。個人化の波によって存在論的不安を覚えた若者たちの中には、その形骸に依存することで自己を安定させようとする者もいる。

しかし、より多数の若者は、それらの形骸に安易に命を吹き込むことは、自分たちの世代を抑圧する文化を復活させることを知り抜いている。このアンビバラントな意識が、若者をスピリチュアルな言説に向かわせる回路だと中村雅彦は指摘する(中村 1988:82-83)。ここで想起されるべきは、現代の日本で流通しているスピリチュアルな言説が、1)対抗文化としての色彩が強い近代スピリチュアリズム、2)カウンセリングという近代的な知、3)先祖祭祀に代表される日本古来の素朴な宗教世界/日本人の伝統的な靈魂観という3者を架橋する形で提供されている点である(中村 1998:82、小池 2007:43、石井 2007:97)。スピリチュアルな言説は、伝統文化といった「大きな物語」を維持しようとする保守的な立場と、それを否定しようとする対抗文化的な立場、近代的な理性原則

というラディカルな立場を並立させているが故に、アンビバラントな意識の持ち主をひきつけてやまないのだ。

3.2 心理主義/マスメディアの影響

香山リカや小池靖は、科学的な真偽よりも、それが望ましい心理的影響を与えるかどうか、「人びとの心を豊かにするかどうか」を優先しようとする、ある意味でプラグマティックな心理主義の蔓延が、スピリチュアルな言説を受容する風潮を招いたと指摘する(香山 2007:146-148、小池 2007:31)。

心理主義的な発想は、科学的な真偽の検証を優先課題とする理性原則への嘲笑となる。科学的な真偽を問おうとする人は「頭が固く感性が鈍い人」か、「目に見える世界しか信じられない心の貧しい人」なのだ(香山 2007:189)。

ただし、それがプラグマティックな文脈においてなされる点において、この嘲笑は、近代的な理性原則と、前近代的な思考法とを両立させていることに注意されたい。「目に見える世界しか信じられない人」を嘲笑する人は、「現代の科学ではとらえられないが、未来の科学ではその実在が明らかにされる」世界の実在を信じている点において、科学や理性原則に半分は信頼を寄せているのだ。

ここにあるのも一種のアンビバラントさである。だからこそ、人びとは、科学至上主義や既成宗教を離れて、近代的な知(カウンセリングや既成宗教への批判)と前近代的な知(祖先崇拜・アニミズム)とを両立させているスピリチュアルな言説に向かうと香山は主張する。

石井研士は、マスメディア、特に野放図に垂れ流されている「スピリチュアル」系のTV番組が直接的に与える影響に注目している。テレ

ビ局は、靈感商法・霊視商法、カルト教団をヒステリックに批判し、視聴者に注意を呼びかける一方で、1970年代からかなりの数の霊能力者や超能力者、占い師などを継続的に登場させてきた（石井 2008:37-38）。くわえて、TVメディアは、公共的で価値中立的なものとして自分を位置づけ続けている。このような環境の中で育った若い世代のリアルが、TV局の「設定」「演出」に近いものになることは想像に難くない。具体的な単語こそ使っていないが、石井の懸念は、メディア論が「培養効果」と呼ぶものにほかならない。ただし、石井自身が認めているように、この効果が定量的に調査された研究は皆無に等しい（石井 2008:101）。

3.3 まとめ

以上、スピリチュアルな言説が受容され続ける要因について、これまで提出された研究の内容を整理し、①～⑥の仮説が得られた。

自己責任が強調される風潮の中で、それに耐えられない個人化した自己は、①直接的な「癒し」のメッセージ、自己肯定のメッセージを求めてスピリチュアルな言説に接近する。あるいは、自己の多元化というバイパスを経て、以下3点において再びスピリチュアルな言説に開かれてしまう。すなわち、②スピリチュアルな言説が既成宗教の言説と連続している感覚の忘却、③「内キャラ」の動機付けを正当化させようとする思い、④「大きな物語」への依存と忌避を並立させようとする思い、の4点である。

その他、⑤スピリチュアルな言説の受容は、科学的な真偽よりも、それが望ましい心理的影響を与えるかどうかを優先する、プラグマティックな心理主義の蔓延と関連している可能性、⑥TVメディアの培養効果、も要因として

考えられた。次節では、これらの主張が、量的調査のデータでどこまで裏付けられるかを解説していこう。

4. 量的データ分析

自己肯定のメッセージを求めたり、多元化した自己像の持ち主ほど、スピリチュアルなものへの関心が高いのだろうか。今回の調査では、自己肯定観や自己認識についての質問をいくつか用意した。具体的には、「人見知りをする」、「『自分らしさ』というものがよくわからない」、「人の好き嫌いが変わりやすい」、「相手に応じて自分のキャラを使い分ける」、「1つのことにのめりこみやすい」（逆転項目）、といったものである。対象者を、これら質問に対し肯定的な回答（あてはまる～ややあてはまる）を返した群と、否定的な回答（あまりあてはまらない～あてはまらない）を返した群に分割して、群ごとに、スピリチュアルな言説への関心度得点の平均値を見ていった。

1)対象者全体で肯定群と否定群との得点の平均値を比較した上で、2)回答者を男女に分けた上で、得点の平均値を比較していったが、ほぼ全ての比較分析において有意差は現れなかった。唯一、有意差が現れたのは、「人見知りをする」男性と、そうでない男性とを比較した場合である（肯定群平均値：-0.382、否定群平均値：-0.109 $p < .050$ ）。

別の角度からも検討してみたい。本調査で用意した友人関係規範13設問に対する因子分析（最尤法）をおこなった。天井効果、フロア効果、共通性を勘案して7変数を削除、残った6変数に対して再度因子分析を試み、2因子構造を妥当とした。プロマックス回転後のパターン

表4：友人関係規範の因子分析結果

	因子1	因子2
問4(3)：グループ全体のノリを大切に、それに合わせた行動をとる	.715	-.023
問4(4)：友だちから自分がどう見られているか気になる	.468	.060
問4(5)：ひとりである時よりも積極的になれる	.346	-.139
問5(1)：リーダーになって苦勞するより、他人にしたがっている方が気楽でよい	.102	.571
問5(2)：友だちの悩みやめごとにはなるべく関わらない方がよい	-.056	.520
問4(1)：特定の友だちとだけ話すのではなく、なるべく多くの友だちに話しかける	.146	-.306

因子相関行列	1	2
1	1.000	.257
2	.257	1.000

行列を表4に示す。第1因子はグループ全体のノリを重視して、刹那的な積極性を表出させる感情、いわば土井隆義が言う「感情の共同体」を構築する因子と考えられる。第2因子は、他人と距離をとりつつも、他人に従おうとする矛盾した感情である。前節の整理をもとに、これを自己の多元化を示す因子と解釈したい。

この解釈に基づいて算出した2つの因子得点と、スピリチュアルなものへの関心度得点との相関係数を算出してみたが、回答者全体での算出、回答者のうちの男性に限定した算出、女性に限定した上での算出、ともに相関は現れなかった。3.3で示した仮説①～③は、今回の調査データからは裏付けられなかったと結論したい。

ついで既成宗教・伝統的なしきたりに関する6つの設問への肯定／否定に基づいて、スピリチュアルなものへの関心度得点の平均値を比較していったが、ここでも有意差は現れなかった。6つの設問とは、1)宗教団体に属している人の気持ちは理解できる、2)宗教団体に所

属している人の気持ちは尊重すべき、3)関心がない人にとって宗教団体の勧誘はありがたいわくだ、4)若者も日本の伝統的な宗教の教義については最低限の知識を持つべき、5)名所となっている宗教施設は未来に残すべき、6)伝統的な年中行事は次世代に伝えていくべき、である。今回の調査では、仮説④を支持する結果を提示できなかったと結論したい。

仮説⑤については、「科学ではわからないこともたくさんある」「科学が進歩すると人間らしさが奪われる」「心霊現象や超能力といった話題は、白黒(真偽)をはっきりさせない方がおもしろい」という3設問で調査した(表5)。特に女性において、科学的なものへの懐疑とスピリチュアルなものへの関心との間に連関があることが示された。その一方で、心霊現象や超能力の真偽を明確化させる／させない志向性とこの関心との間には有意は連関は全く見られない。仮説⑤の正当性も、今回の調査から明らかにすることは困難である。

⑥については、情報の入手先とスピリチュア

表5：スピリチュアルな言説への関心度得点・平均値比較

	男 性			女 性		
	肯定群 平均値	否定群 平均値	有意 水準	肯定群 平均値	否定群 平均値	有意 水準
世の中には科学ではわからないこともたくさんある	-.272 (166)	-.356 (27)	.703	.225 (283)	-.182 (14)	.102
科学が進歩しすぎると人間らしさが失われる	-.220 (96)	-.353 (98)	.590	.264 (224)	.026 (73)	.051
心霊現象や超能力といった話題は、白黒（真偽）をはっきりさせない方がおもしろい	-.293 (101)	-.303 (96)	.940	.194 (172)	.203 (127)	.938

() は度数

ルなものへの関心との連関を探った。今回の調査では、「話題になっている都市伝説や超常現象」について、情報の入手先を質問した。与えられた選択肢は、口コミ、販売店・街かど、パソコンのインターネット、ケータイのインターネット、テレビ・ラジオ、新聞・雑誌の7項目である。選択肢より、対象者を「テレビ・ラジオから都市伝説や超常現象の情報を得る群」と「それ以外から情報を得る群」に分けて、スピリチュアルなものへの関心度得点を比較したところ、女性のみで有意差が現れた ($p < .050$)。「テレビ・ラジオから都市伝説や超常現象の情報を得る群」(173名)の関心度得点の平均が0.307であったのに対して、「それ以外から情報を得る群」(126名)は0.054に過ぎなかった(男性では有意差なし)。テレビ霊能者が登場する番組が、女性が抱くスピリチュアルなものへの関心を高めている可能性が示唆された。

5. 結論と今後の展望

以上、スピリチュアルなものに対する関心度

得点を算出した上で、スピリチュアルな言説への関心が高まる経緯について、これまで提起されてきた仮説を実際のデータで確認していった。

自己像に関する仮説が基本的に論証されなかったことは、現在の若者の心性や、若者文化を対象とする理論的研究・質的研究において、「多元化した自己」(あるいは「データベース化した自己」)概念がしばしば所与のものとしてされている点に重大な懐疑を突きつけるものだろうな。むしろこれは、今回の調査で集まったサンプル数、質問項目に由来する可能性はある。ただし、この「自己の多元化」概念が、精神医学や心理学・精神分析の用語を安易に引き込んだ「批評」として、実証データを欠いたまま展開されてきたことも事実である。われわれは、今回の結果をふまえて、「多元化する自己」像をもとにした議論の妥当性について、より多くの研究実績を積み上げる必要がある。

むしろ、今回の研究で明らかにされたことは、スピリチュアルなものへの関心のあり方が男女で異なっていることである。科学への不信

や、科学よりも心理を優先したいという志向がスピリチュアルな言説への関心と連動しているのは、女性に限ってのことであった。また、テレビ霊能者が登場する番組を視聴する割合は女性の方が高かった。女性はテレビ番組を通してスピリチュアルな言説への関心を高めている可能性も見いだされた。

案外、スピリチュアルなものへの関心は、近藤雅樹が指摘した、「靈感を持つこと」にあこがれる女性のメンタリティに直結しているだけの話かもしれない(近藤 1997)。しかし、この感覚が正しいとするならば、「女性はなぜ、死者からのメッセージに夢を託すのか」「女性はなぜ、心理主義的な考え方を持つ傾向にあるのか」といった問題が浮かび上がる。また、紙数の関係で詳細は省略するが、今回の調査では、伝統的な宗教や年中行事・しきたりを尊重する態度にも明らかな性差が見られた(女性>男性)。これらの知見は、その背景に何らかのジェンダー・トラッキング/ヒドダウン・カリキュラムが存在することが示唆されている⁶⁾。

さらに言うなら、受容的な態度を見せるスピリチュアル・カウンセラー、失踪者の行方を真摯に捜す超能力捜査官が発する、近代的知と伝統的な宗教思想を折衷させた言説に女性がひきつけられやすい理由も、ジェンダー論的な姿勢から改めて検討されるべき課題であろう。

ここで目を向けるべきは、「傷つき癒されたい『弱い自己』」であることを裏付けてくれる言葉を求める志向は、特に若い女性において顕著だという小池のジェンダー論的な指摘である。小池はその理由を、女性は「勝ち組」「負け組」のどちらであろうと、①職場での自己実現・地位達成が困難だという感覚、②収入が高い男性と結婚してセレブな専業主婦生活を送る

ことも非常に困難だという感覚、に求めている(小池 2007:35-37)。格差社会の中で、女性が男性以上の重圧を受けているという指摘は正しい可能性がある。著者はここを出発点として今後の研究を展開したい。この方向でスピリチュアル・ブームを研究することは、宗教社会学のみならず、ジェンダーに関する社会学的研究をも前進させるものとなるだろう。

注

- 1) 「スピマ」とは、(株)北斗が運営する、「癒し&スピリチュアルのフリーマーケット型見本市」のことである。北斗によれば、年間約60会場、11万人が利用していると言う。Supima <http://spima.jp/> (2009年9月1日閲覧)
- 2) 「スピリチュアリティ」という単語と「スピリチュアル」という単語は、宗教社会学者によっても無意識的に区分されているようだ。「スピリチュアリティ」について論じた榎尾(2002)、伊藤・榎尾・弓山(2004)の具体的な研究内容は、むしろニューエイジ運動とその周辺に限定されている。
- 3) 1970年代に「オカルト」という言葉を着実にこの国に根付かせた映画『エクソシスト』(1974)は、悪霊に憑依された少女をめぐる物語であったし(金子 2006:18)、数多くの超能力者や霊能力者がTVの「オカルト番組」でパフォーマンスを披露した。霊が偶然写りこんだ「心靈写真」が多数出現したのもこの時期である(小池 2000)。
- 4) これ以外の議論として磯村(2007)、植木(2008)、山本(2007)などがある。
- 5) 「スピリチュアル・カウンセラー」を自称する江原啓之の風貌や話し方が、カリスマ的権威と受容的な態度をかもしだしていることは、香山が指摘するところである(香山 2007:117)。
- 6) 近藤(1997)の難点は、なぜ「靈感少女」なのか(「超

能力少年」はいるが「靈感少年」は少ない」というジェンダー論的視点の完全な欠落である。

文献

Berger, Peter L., 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York: Doubleday & Co. (=1979, 藺田稔訳『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社).

Cox, Harvey G., 1966, *The Secular City: Secularization and Urbanization in Theological Perspective*, New York Macmillan Co. (=1967, 塩月堅太郎訳『世俗都市——神学的展望における世俗化と都市化』新教出版社).

浅野智彦、2006、「若者の現在」浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』勁草書房：233-260.

土井隆義、2009、『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波書店.

石井研士、2008、『テレビと宗教——オウム以後を問いただす』中央公論.

磯村健太郎、2007、『〈スピリチュアル〉はなぜ流行するのか』PHP研究所.

伊藤雅之、2003、『現代社会とスピリチュアリティ——現代人の宗教意識の社会学的研究』溪水社.

伊藤雅之・檜尾直樹・弓山達也(編)、2004、『スピリチュアリティの社会学』世界思想社.

檜尾直樹(編)、2002、『スピリチュアリティを生きる——新しい絆を求めて』せりか書房

香山リカ、2006、『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』幻冬舎.

木原善彦、2007、「データベース化する心霊——『霊』のいる場所と『私』のいる場所」柳廣孝・吉田司雄編著『霊はどこにいるのか』青弓社.

小池壮彦、2000、『心霊写真』宝島社.

小池靖、2007、『テレビ霊能者を斬る——メディアとス

ピリチュアルの蜜月』ソフトバンク.

近藤昌樹、1997、『靈感少女論』河出書房新社.

中村雅彦、2000、「オカルト流行の社会心理学」渡辺恒夫・中村雅彦『オカルト流行の深層社会心理——科学文明の中の生と死』ナカニシヤ出版.

島蘭進、2006、『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店.

土佐昌樹、1998、『インターネットと宗教——カルト・原理主義・サイバー宗教の現在』岩波書店.

植木不平等、2008、『スピリチュアルワールド見聞録』楽工社.

山本弘、2007、『超能力番組を10倍楽しむ方法』楽工社.